

医薬品供給車 石川・珠洲入り

被災地の支援

県薬剤師会も

能登半島地震を受けて7日、岐阜市の岐阜薬科大が所有する「モバイルフาร์มシー（災害対策医薬品供給車両）」が石川県珠洲市に到着し、岐阜県薬剤師会が活用を始めた。石川県薬剤師会の要請で日本薬剤師会が調整し、岐阜県の車両は第1陣として被災地の支援に当たっている。

（室木泰彦）



①石川県珠洲市で活動するため7日に出発した岐阜薬科大所有のモバイルフาร์มシー ②薬剤師が立って作業ができる車内。いずれも金沢市で（石川県薬剤師会提供）

この日は、岐阜の3人と石川の2人によるチームが金沢市から出発。石川県薬剤師会によると、車両内には、病院や診療所などに見られる薬局機能が備わる。車内で薬剤師が立って作業できる高さも確保され、移動しながら作業ができる。薬剤師3人が寝泊まりでき、ソーラー発電設備があり、飲料水や食料も保管できる。

薬剤師の健康維持のため、被災地でもなるべく宿泊施設を利用するように努めるが、被害が甚大な地域では施設に宿泊できない場合も多い。この車両では外部の機能を使わず過剰させるため、被災地に負担をかけずに活動することができると話している。

原則、医師がいないと薬の処方できないため、被災地では医師に帯同する形で避難所などを巡回。糖尿病など持病がある被災者の薬が切れないうつにする。

第2陣として9日から三重県の薬剤師が石川県輪島市に入る予定。今後も宮城県や広島県などの薬剤師が応援に入る見通し。チームができるだけ効率的に円滑に被災地で活動できるように石川県薬剤師会の先遣隊が、道路状況や薬剤の必要量などを調べてあるという。同会の中森慶滋会長は「今後とも状況に合わせてきめ細かい対応をしていきたい」と話している。